乳児の摂食外行動に対する親の対応の個人差

――離乳食場面の観察データから――

福田　佳織・森下　葉子・尾形　和男

要　旨

乳児に対する養育行動の中で、親が困難を感じる事柄の１つが食事にまつわるものといわれる。乳児に食事を与える場面（離乳食場面）における親の行動は、その後の子どもの発達と関連することが報告されており、重要な場面であることが窺える。しかし、実際に親はどのように乳児に食事を与えているのか、その様子はあまり報告されていない。そこで本研究では、離乳期の乳児（８～10ヵ月）とその親（母３名、父３名）の離乳食場面を観察し、乳児が摂食外行動を示した際の親の乳児への対応の個人差について検討した。その結果、①ゆとりを持ちながら乳児の様子をじっくり観察する親、②厳しくはないが食べるように指示する親、③微笑んで乳児の様子を眺めている親、④乳児の行動にしっかり反応する親、⑤食べさせることに必死になっている親が見られた。このように同じ離乳食場面での行動であっても、親の対応には個人差が見られ、それらが後の子どもの発達に影響を与える可能性が示唆された。

問題と目的

乳児に対する養育行動の中で、親が困難を感じる事柄の１つが食事にまつわるものといわれる。亀崎ら(2011)は、７割以上の母親が離乳食について困った経験があり、母親は離乳開始後も長期に渡って不安や疑問を持ち続けるという報告から、離乳期の支援が必要であるとしている。また、１歳児をもつ母親のソーシャルメディア上の発言内容を分析した井田・猪下(2015)は、育児情報ニーズとして、子どもの栄養に関するものが多くを占めていることを明らかにした。ベネッセ教育総合研究所(2018)でも、０～１歳児を持つ母親にとって、「離乳食・幼児食の与え方」は子育ての悩みの中で圧倒的に高く、特に低月齢(６ヵ月～９ヵ月)・中月齢(10ヵ月～１歳１ヵ月)で高い(それぞれ、45.8%、42.1%)。さらに、厚生労働省(2016)平成27年乳幼児栄養調査結果の概要によれば、０～２歳児の保護者の離乳食に関する悩みの内訳は、作り手の負担(33.5%)や丸のみする(28.9%)に続き、食べる量が少ない(21.8%)、食べ物の種類が偏っている(21.2%)、食べさせるのが負担、大変(17.8%)となっている。これらのことから、親は乳児に離乳食を与えることに困難を抱え、試行錯誤しながら離乳期の食事を進めていることが窺える。

このように、乳児期の養育行動において困難度の高い離乳期の食事であるが、福田(2016)は、離乳食場面に見られる母親の敏感性（乳児のシグナルに対する親の①迅速な気づき、②正確な解釈、③適切な応答、④迅速な応答という４側面からなるスキル（Ainsworth et al., 1974））と１年後の子どもの

アタッチメント安定性の関連性との間には有意傾向の相関（r＝.218, p＜.10）があることを示している。このことから、離乳食場面に見られる親の行動は、後の子どもの発達と関連する可能性があり、この場面における親の行動に着目することは有益と考えられる。しかし、親が具体的にどのように食事を進めているかの報告はほとんど見られない。

そこで、本研究では、離乳食場面に見られる親の乳児への対応の個人差について検討することとする。中でも、葛藤を引き起こす場面の方が、親の行動特性を捉えやすい（Smith & Pederson, 1988）と言われることから、食事がスムーズに進まない乳児の摂食外行動の見られた場面における親の対応に着目することとする。摂食外行動とは、親が食べ物を乳児の口元に運び、食べさせようとする行動（食事供給行動）に対する、乳児の摂食行動（口に入れ飲み込む行動）以外の行動を指し、福田・森下・尾形（2020）は、個人差はあるものの、食事供給行動の３割程度しか摂食行動に至らないことを明らかにした。また、対象児全員が何らかの摂食外行動を表出したという。

なお、乳児の摂食外行動時の親の対応の個人差を検討するにあたっては、その行動（発話、視線、動き、雰囲気等）を記述することとする。また、親の行動だけでなく、乳児の行動（動き、情動状態、発声等）についても記述する。乳児に対する親の行動は、力動的・連続的・双方向的な相互作用による産物であるためである。それらの記述から、親の個人差が見られた行動を抽出し、考察していくこととする。

方　法

⑴　協力者

関東圏在住で離乳食開始期～生後10ヵ月の乳児を持ち、父親・母親ともに調査協力を得られた10家庭のうち、全家庭における乳児の摂食外行動数のバラつきを考慮して、その回数が同程度であった父子３組（１回の離乳食場面において、14回（延べ14回）１組、14回（延べ15回）１組、15回（延べ16回）１組）、母子３組（１回の離乳食場面において、９回（延べ13回）１組、15回（延べ16回）１組、16回（延べ17回）１組）を抽出して分析の対象とした（上記父親３名および母親３名の中に夫婦のペアはいない）。乳児の摂食外行動が同程度である親子を分析対象として抽出した理由は、親の対応の個人差を検討するにあたり、乳児の摂食外行動の多寡による影響を極力回避するためである。なお、１回の親の食事供給行動に最大２種類の摂食外行動が発生することがあった（述べ回数で記述している）。分析対象の乳児は８ヵ月３名、９ヵ月１名、10ヵ月２名であり、男児５名、女児１名である。父親の年代は30代が２名、40代が１名であった。母親の年代は20代が２名、30代が１名であった。

⑵　調査期間

2017年９月１日～2019年３月31日に調査を実施した。

⑶　調査手続き

著者の知人等を通して協力者の候補となる家庭に調査の概要を伝えた。そして、概ね了承を得た家

庭に対し、著者よりメールまたは電話連絡をした。その際、調査の詳細について書かれた説明書をメール添付または郵送し、その後、協力者の質問に応じた。その上で、調査協力を了承した家庭と調査日時のアポイントを取り、その日時に調査者が１人で家庭訪問した。訪問時、調査者から今回の調査についての詳細を再度説明し、了承を得た場合に調査承諾書に署名をもらった。家庭訪問では、観察調査（ビデオ撮影)、および、質問紙調査、インタビュー調査を行った（順番は、協力者の都合によって異なる）が、本論文では、観察調査データのみを使用するため、質問紙調査、インタビュー調査の内容は割愛する。ただし、質問紙調査により得られた属性に関する情報（父母の年代、および、子どもの月齢・性別）は使用する。

撮影は、親が乳児に離乳食を与えている場面で、調査者（第１執筆者あるいは第２執筆者）が行った。撮影にあたって、食事を与える親と乳児の２人きりの場面とすること、食事をすべて食べきる必要はないこと、食事終了は親に任せ、時間の制限を設けないことを説明した。撮影は、親子の顔ができるだけよく見える場所から撮影された。できるだけ普段通りの環境での食事をお願いしたため、TVがついていたり、音楽がかかっていたりするケースもあった。

⑷ 乳児の摂食外行動と親の食事供給行動のコーディング

第１執筆者が行動コーディングシステム（BECO 2）を用いて、親の「食事供給行動」、および、乳児の「摂食外行動」をコーディングした。本研究では、親がスプーンなどの食具（山口(2001)は、食事に使用する棒状のものを食具、器状のものを食器としている）に食べ物を乗せた状態、あるいは、親が手づかみで食べ物を持った状態で乳児の口元まで近づけようとした時点から、乳児がそれを口に入れた時点まで、あるいは、乳児がそれを食べないために親が乳児の口元から食具や手を離し始めた時点までの一連の行動を親の「食事供給行動」とする。また、そのように口元に近づけられた段階で乳児が摂食以外の行動を取り、その結果、親が食事を与えられなかった（食器具や手を乳児の口元から離した）場合に、その食事を与えられない直接的原因となった乳児の行動を「摂食外行動」とする（ただし、食べ物を口に入れた直後にほぼすべてを口から出した場合も摂食外行動とする)。

コーディングにあたり、口に入れた瞬間や食具が口から出る瞬間が見えない場合であっても、乳児の頭の角度や親のスプーンの動きと角度、食具に食べ物がなくなっている等から、親の食事供給行動や乳児の摂食行動があったと判断できる場合はコーディングした。なお、乳児が食具に乗った食べ物の半分程度しか食べていない場合も、摂食行動があったとみなした。また、乳児の摂食行動時に口の周りに食べ物の一部がついてしまい、親がその口の周りの食べ物を食具で拭い取って乳児の口に入れた場合、その行動は新たな親の食事供給行動や乳児の摂食行動としてカウントしなかった（すでに親の食事供給行動、乳児の摂食行動として１回カウントしているため)。一致率を算出するため、２家庭（父子２組、母子２組の計４組）について、第２執筆者と第３執筆者がそれぞれ独立にコーディングし、第１執筆者との一致率を算出した。その結果、「摂食外行動」の一致率は96.00％、親の「食事供給行動」の一致率は99.34％であり、高い一致率が得られたため、その他のデータの分析については第１執筆者のコーディングを用いた。なお、一致率算出の際に見られた不一致の箇所は再検証して一致

を試み、最終的には４組のコーディングが100％一致した。

⑸　親および乳児の行動

親や乳児の行動は、乳児が摂食外行動を表出した前後に着目し、親や乳児の行動の文脈が把握可能なひとまとまりを１つのブロックとして記述した。

⑹　人権の保護及び法令等の遵守への対応

調査にあたっては、研究協力の申し出のあった父親及び母親に対して、「研究に関する説明書」（本研究の目的や内容、データの扱い、調査の謝金、調査の撤回等について詳細に書かれたもの）を手渡し、調査者がそれを読み上げる形で確認した。これらの内容に十分な理解と了解を得られた場合に限り、父母に「調査承諾書」への署名をもらい、調査に参加してもらった。

また、承諾後も、協力者には何の不利益もなく、いつでも調査を撤回できる自由があることを説明し、撤回書も配布した。

なお、質問紙等は全て番号で管理され、照合のためのデータは別に保管するようにし、連結不可能とした。撮影された映像は、学内で数値化し、そのデータを分析する。映像は個人研究室（鍵つき）で厳重に保管し、研究終了後に消去（信頼性の高いデータ末梢ソフト使用）する。個人が特定され得るデータを扱う必要がある場合は、LAN等非接続のパソコンを使用した。

結　果

親の対応の個人差について検討するため、乳児の摂食外行動時における６組の親子の行動記述を行った。その結果、親の食事供給行動に対し、乳児が摂食外行動を取った場合、①ゆとりを持ちながら乳児の様子をじっくり観察する親、②厳しくはないが食べるように指示する親、③微笑んで乳児の様子を眺めている親、④乳児の行動にしっかり反応する親、⑤食べさせることに必死になっている親が見られた。なお、下記には、それぞれの特徴を表す乳児と親のやり取りの１ブロック（親の食事供給行動、乳児の摂食外行動、乳児の摂食外行動を受けての親の対応のセット）を示すが、それぞれ１回限りの対応ではなく、その親に比較的多く見られた特徴的な対応を抽出している。なお、乳児の泣きやぐずりによる摂食外行動とそれ以外の摂食外行動とでは、親の対応も異なる可能性があり、親の個人差ではなく摂食外行動の種類による差を捉えることとなってしまうため、６組すべてにおいて泣きやぐずりによる摂食外行動への親の対応は取り上げていない。

①ゆとりを持ちながら乳児の様子をじっくり観察する親

母Ａ、父Ｆともに、終始落ち着いた温かい雰囲気で、乳児の摂食外行動にも動じず、どのタイミングで食事供給すれば摂食するかをよく観察する傾向がある。

表１　ゆとりを持ちながら乳児の様子をじっくり観察する親のやり取り例

乳児A	母A
さらにうつむき、もう片方の手を頭に上げる。	自分の身体を少し乳児に近づけ、食事用スプーンを差し出しながら、「ね」（その発話の直前に「今日はよく食べますね」と言葉かけしている流れでの「ね」）と声をかける（食事供給行動）。
頭に上げた手をテーブルに振り下ろす(摂食外行動）。顔はうつむいたまま。手を下したときに、乳児の袖に入っていたスプーン（乳児が遊ぶように渡してあった）が落ちる。	
	乳児の手の振り下ろしに反応して、食事用スプーンを引き戻す。その際、ゆとりのある様子でしばらく**乳児の様子を窺うように見ている。**「食べましゅね（褒め）」と言って、落ちた遊び用スプーンを拾う。

乳児F	父F
	「はいどうぞ」と乳児の口にスプーンを近づける（食事供給行動）。
親指を吸っている（摂食外行動）。	
	スプーンを少し離して、ゆとりのある感じで、乳児の様子を見つめる。

②厳しくはないが食べるように指示する親

食事供給行動の後、乳児が摂食外行動を取ると、下記のような食べるよう指示することが多い。下記の言葉かけの他にも、「パクって（して)」、「スプーン持ってみな」といった指示が目立つ。乳児の様子を見ることもあるが、全体的に乳児の行動を待つことが少なく、親がイニシアチブを取っている傾向がある。

表２　厳しくはないが食べるように指示する親のやり取り例

乳児B	母B
	乳児が母の持つスプーンを掴もうとするその手をかわし、スプーンを乳児の目の前に差し出す（食事供給行動）。
スプーンを見つめて、**スプーンの先に乗っている食べ物を触る（摂食外行動）。**	
	「ロパックンしてごらん」と言って、スプーンを乳児の口元にさらに近づける。

③微笑んで乳児の様子を眺めている親

たとえ乳児が摂食外行動を示しても、その行動をおかしく感じているような様子である。過度ではない程度に表情豊かで、乳児とのやり取りを楽しみ、乳児を慈しんでいる雰囲気が見られる。

表３　微笑んで乳児の様子を眺めている親のやり取り例

乳児C	母C
激しく手を揺らし、それを見つめる（摂食外行動）。	「はい」と言って、スプーンを近づける（食事供給行動）。 手にぶつかりそうになるので、スプーンを戻す。**乳児の様子を見て微笑む（いくぶん息が漏れる程度の笑い）。**

④乳児の行動にしっかり反応する親

摂食外行動であっても、乳児の行動の１つ１つに反応し、感心してみせたり、褒めたりしている。また、乳児がネガティブな情動を表出した際も、「簡単に気分変えられないよね」などと、乳児の気持ちに共感する声掛けをしている。乳児相手であっても、対等に話をしている様子である。

表４　乳児の行動にしっかり反応する親のやり取り例

乳児D	父D
手首をクルクルとひねるようにして、自分の手を見ている（摂食外行動）。	「はい」といって、スプーンを乳児に近づけようとする（食事供給行動）。 乳児の動きに気づき、**「あー、そうそうそう」と言いながら、父自身も乳児と同じ手の動きを真似て見せる。**

⑤食べさせることに必死になっている親

常に余裕がなく、乳児に摂食させなければならないという焦りを感じているようである。調査であることに対して、責任を果たさなければという気持ちが強いためかもしれないが、乳児が摂食外行動を示すと、あらゆる方法で何とか食べさせようと四苦八苦している。乳児の行動に翻弄されている様子である。

表５　食べさせることに必死になっている親のやり取り例

乳児E	父E
口を開かない（摂食外行動）。	「ツンツン、どうぞ」といって乳児の唇をスプーンでつつく（食事供給行動）。 **そのままスプーンを口元に近づけたまま「はいよ」と懸命に声をかける。**

考　察

離乳食場面において、乳児が摂食外行動を示した際の親の行動について、6名の親を対象に分析した。その結果「ゆとりを持ちながら乳児の様子をじっくり観察する」、「厳しくはないが食べるように指示する」、「微笑んで乳児の様子を眺めている」、「乳児の行動にしっかり反応する」、「食べさせることに必死になっている」という5つの特徴的な行動が抽出された。

先述の通り、福田(2016)は、離乳食場面に見られる母親の敏感性と1年後の子どものアタッチメント安定性の関連性との間には有意傾向の相関を示している。確かに、養育者の敏感性は子どものアタッチメントを正にも負にも予測する主要な要因の1つとなっている（例えば，Beijersbergen et al., 2012；NICHD Early Child Care Research Network, 2001, 2004, 2008；Sroufe et al., 2005）。しかし、この敏感性は、子どもから発せられるサインへの気づき、解釈、行動的応答とそのタイミングという多くの要素の集合体とも考えられ、どの側面がより主要な役割を担っているのかが明確でない（篠原, 2009）という指摘も見られ、敏感性の様々な派生概念が提唱されるようになった。その一つが洞察性である。洞察性とは、子どもの行動を、その背景にある感情や思考といった動機に基づいて思考しようとする傾向で、母親の洞察性が子どものアタッチメント安定性と関連することが見出されている（Oppenheim, Koren-Karie, & Sagi, 2001）。今回の結果から見い出された「乳児の行動にしっかり反応する」という親の行動においては、乳児が何をしたいのか、どのように感じているのかを受け止め、それを言葉や動きで示していたことに特徴がある。こうした行動の背景には、上記の洞察性があるのではないかと考えられる。

アタッチメントと関連付けられる概念として、他にもメンタライジング能力が挙げられる（Fonagy & Target, 1997）。メンタライジングとは、自分と他者の行動の背後にある心理状態（考え、感情、欲求など）に注意を向け、それを認識することを指し、その認識には、その心理状態を引き起こした原因やその心理状態の意味についての認識も含まれる（Allen, 2012/2017）。子どもだけでなく、親自身の心理状態にも目を向けることで、自分の行動の背景に気づき、子どもに要求ばかりする行動を制御できる可能性は高い。今回の結果から抽出された「厳しくはないが食べるように指示する」行動も、問題のあるレベルではないが、親のメンタライジング能力が低い場合は、乳児の心理的背景を無視し、自身の行動の心理的背景にも注意を払わないことで、親自身の欲求の赴くままの行動（無理強いして食事を与えるなど）に至ってしまうおそれもある。

いずれにせよ、子どもの行動の背景を読み取るには、子どもをよく見る必要がある。そういった点では、「ゆとりを持ちながら乳児の様子をじっくり観察する」行動は、適切な親の行動を導く基本的な態度と言えよう。そして、「食べさせることに必死になっている」と、乳児のシグナルを受け取ることが困難になるため、悪循環に陥る場合もある。先行研究でも示されたように、離乳食を与えることに困難を抱えている親が多いことから、こういった悪循環が生じやすいことは容易に想像できる。本来であれば、他者からのサポートを必要とするが、核家族化の社会ではそれも困難である。「絶対に食べさせなければならない」、「食べないと病気になる」といった極端な思考に囚われないよう、今一度、

乳児や親自身の心理的背景に目を向ける（メンタライジングする）必要があるだろう。

このように、同じ離乳食場面であっても親の行動の特徴は様々であり、乳児の摂食外行動に対する具体的な親の行動を抽出することで、それらの行動が後の子どもの発達（アタッチメント形成）に影響を与える可能性が示唆された。

今後の課題

本研究では、乳児の摂食外行動に対する親の行動を記述し、それぞれの親に特徴的な行動を抽出した。しかし、今回扱った乳児の摂食外行動は、強度のネガティブな情動状態（泣き・ぐずり）を伴わないものに限った。それは、離乳食中にネガティブな情動状態をほとんど示さない乳児とかなり示す乳児とがおり、親の対応の個人差を見るには、乳児の個人差をできるだけ排除する必要があったためである。しかし、Ainsworth et al.(1974)の敏感性尺度は、乳児のネガティブな情動のシグナルに対する養育者の敏感性と相関が高い（近藤ら，2006）ことから、こうしたネガティブな情動状態への親の対応にも着目する必要があるだろう。今後は、泣き・ぐずりが表出された乳児を対象に、その親の対応を扱っていくこととする。また、分析視点としても、親の行動全体を捉えるだけでなく、親が示す乳児の情動への同調性、発話の内容とトーン、表情、アイコンタクト等を取り上げていく。このように、親の行動をさらに子細な視点から検証することで、子どもの発達に及ぼす要因を明らかになることが推測される。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Bell, S. M., & Stayton, D. F.(1974). Infant-mother attachment and social development: 'Socialization' as a product of reciprocal responsiveness to signals. In M. P. M. Richards (Ed.). *The integration of a child into a social world* (pp.99-135). Cambridge: Cambridge University Press.

J. G. Allen(著). 上地雄一郎・神谷真由美(訳). (2017). *愛着関係とメンタライジングによるトラウマ治療ー素朴で古い療法のすすめ* 北大路書房. (Jon G. Allen. (2012). *Restoring mentalizing in attachment relationships: Treating trauma with plan old therapy*. American Psychiatric Association Publishing. VA, United States.)

Beijersbergen M., Juffer F., Bakermans-Kranenburg M., van IJzendoorn M. (2012). Remaining or becoming secure: parental sensitive support predicts attachment continuity from infancy to adolescence in a longitudinal adoption study. *Developmental Psychology*, **48**, 1277-1282.

ベネッセ教育総合研究所.(2018). *乳幼児の生活と育ちに関する調査2017　0-1歳児編* ベネッセコーポレーション.

Fonagy, P., & Target, M. (1997). Attachment and Reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, **9**, 679-700.

福田佳織.(2016). 母親の敏感性測定における場面設定の検討ー食事場面・遊び場面における母親の敏感性と１年後の子どものアタッチメント安定性の関連からー*日本発達心理学会第27回大会*, 565.

福田佳織・森下葉子・尾形和男.(2020). 父親・母親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の出現状況：離乳食場面の観察から *東洋学園大学紀要*, **28**, 35-44.

井田歩美・猪下光.(2015). １歳児をもつ母親の離乳に関連した育児情報ニーズーソーシャルメディアにおけ

る発言の分析　*ヒューマンケア研究学会誌*, **7**(1), 21-27.

亀崎明子・田中満由美・野崎亜希.(2011). 乳幼児期の子どもをもつ母親への栄養指導と離乳食の実態　*山口県母性衛生学会会誌*, **27**, 12-17.

近藤清美・井上望・中野茂・草薙恵美子.(2006). アタッチメントに関わる母親の敏感性概念の検討　*北海道医療大学心理科学部研究紀要*, **2**, 13-24.

厚生労働省.(2016). *平成27年乳幼児栄養調査結果の概要 第1部 乳幼児の栄養方法や食事に関する状況* https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000134207.pdf (アクセス日：2019年6月4日).

NICHD Early Child Care Research Network.(2001). Child-care and family predictors of preschool attachment and stability from infancy. *Developmental Psychology*, **37**, 847-862.

NICHD Early Child Care Research Network.(2004). Father's and mother's parenting behavior and beliefs as predictors of child social adjustment in the transition to school. *Journal of Family Psychology*, **18**, 628-638.

NICHD Early Child Care Research Network.(2008). Mathers' and fathers' support for child autonomy and early school achievement. *Developmental Psychology*, **44**, 895-907.

Oppenheim,D. , Koren-Karie, N., & Sagi, A.(2001). Mother's empathic understanding of their preschooler's internal experience: Relations with early attachment. *International Journal of Behavioral development*, **25**, 6-26.

篠原郁子.(2009). 母親の「子どもの心に目を向ける傾向」の発達的変化について－生後5年間に亘る縦断的検討－*発達研究*, **23**, 73-84.

Smith, P. B., & Pederson,D. R.(1988). Maternal sensitivity and patterns of infant-mother attachment. *Child Development*, **59**, 1097-1101.

Sroufe, L. A., Egeland, B., Carlson, W. A.(2005). *The development of the person: The Minnesota Study of Risk and Adaptation from birth to adulthood*. New York, NY: Guilford Press.

山口昌伴.(2001). 食の道具たち① *食の科学*, **276**, 50-57.